

**シンポジウム発表**

**自然美と芸術美のあいだ—50年目の環境芸術からみた環境思想—**

**伊東 多佳子（富山大学）**

古来、自然と芸術は対立概念として捉えられてきた。西洋哲学において、神の被造物である自然と人間の生み出した芸術（という人工物）という二項対立はきわめて強固なものであったし、この対立図式は美学においても保持され、伝統的に自然美と芸術美は分けて論じられてきた。18世紀終葉まで、神の絶対性の下に自然美は圧倒的な優位を誇っていたが、ヘーゲル美学によって芸術美にその地位を譲ることになる。以降、美学は、芸術学への名称変更が真剣に議論されるほどに、芸術をその中心的な主題とし、自然美は周縁に押しやられることになる。再び自然美について議論されるようになるには、1960年代後半の環境美学の登場を待たなければならない。

奇しくも同じ1960年代後半に、自然環境そのものを素材にした芸術がアメリカ合衆国で制作され始めた。ランド・アート、アースワークと呼ばれる環境芸術の始まりは、一般に1968年といわれることが多い。「世界を揺るがした」年といわれる1968年、ベトナム戦争に対する反戦運動や公民権運動を始めとして、あらゆる既存の価値に対する異議申し立てが生じ、アメリカのみならず世界中で社会の急激な変化が起きた。自然環境に関わる思索にとっても重要なこの年、アポロ8号による「地球の出」写真によって人類史上はじめて宇宙から地球を眺めることになる。美しい瑠璃色の惑星を外から見るという体験が、地球上の生命とその環境について考えるための新たな視座を与え、1962年に出版されたレイチェル・カーソンの『沈黙の春』に触発された環境保護意識

の高まりを加速させることになった。この「環境時代」の始まりに誕生した環境芸術は、人間と自然との関係、そしてその背景にある環境思想を直接反映することで、従来の自然と芸術という二項対立を無効にする企てとなる。一方でそれは自然と芸術の境界を曖昧にし、他方で、自然と人工物の区別が難しく、境界線が曖昧で両者の濃度の違いでしかないような複雑な現代の自然環境をはっきりと映し出すものとなり、環境芸術は、その登場から 50 年近くの時を経た現在、きわめて多様な表現に分岐し、拡張している。

本論では、自然美と芸術美の中間に位置する環境芸術を手がかりに、(自然としての)自然観照と(芸術としての)芸術観照の境界を定めることの危うさを明らかにしながら、自然と芸術(ないし人工)の二項対立の図式が無効化している現代の自然環境の問題について、自然の価値をめぐる環境思想の観点から論じる。